

平成 20 年度名誉員 橋本安雄 氏 ～出会いこそ人生，われ以外みな師～

齊藤 紀彦

(株)きんでん



出会い，電力システム，500 kV 交差二重外輪系統，紀伊水道直流送電

1. はじめに

橋本安雄氏は，昭和 30 年代から平成 10 年代の関西電力(株)の成長時代に，系統保護や系統計画など電力系統のプロとして歩まれた。関西電力の 500 kV 交差二重外輪系統や紀伊水道直流送電という電力システムは，今も世界に誇る信頼度，技術力を有するものだが，その構築に大きな功績を残された。

「出会いこそ人生，われ以外みな師」の立場を貫かれた氏は，氏と「人生で出会う」幸運を得た我々多くの者にとってみれば，たとえ氏の意図の外であったとしても，否，意図せざるが故に自ずと六然を包み込んだ「氏また，われらみな師」という大きな存在に他ならなかったことを，今回の聞き取りの機会を通して再認識させていただいた。

2. 聞き取りの概要

2.1 生い立ち／大学まで

1933 年に京都西陣の呉服屋の長男として生を受ける。小学校の多感な時期に戦争を経験し，小学校 6 年生のときに終戦を迎えた。氏は剣道の聖地である京都武徳殿で剣道を始める。戦争に負け，アメリカ軍が剣道を禁止したため辞めざるを得なかったが，後に精神を鍛えるのに役立つ剣道との出会いはこのころである。

西陣で商売をしている家の長男は，家を継ぐのが慣習であり，氏も家を継ぐことを念頭に旧制中学校（5 年制）の京都第二商業学校へ入学した。しかし，旧制中学校 3 年生の秋に学制改革があり，現在の 6・3・3・4 制に変わる大きな転機を迎える。京都第二商業学校は廃校になり，商業学校ではない，普通の中学校，高等学校に通うことになる。

この高等学校で Y 氏と出会う。高等学校 2 年生まで商業コースに通っていたが，呉服屋の景気もあまりよくないと考えていた中，同じ商業コースの Y 氏からの誘いがあり，家業を継ぐのをやめ，大学入学を目指す。その際に選んだのが電気工学科。これからは電気の時代と先を見据えた選択をする。

京都大学入学後，塚原ト傳の「・・・もののふの・・・究る

ところは死ひとつなり」という言葉に引かれて，武士が修業した剣道に魅力を感じ，剣道を再開し一生打ち込むこととなる。

2.2 社会人

(1) 関西電力就職

関西電力入社 1 年目の実習時代，対象座標法を用い長距離送電線における発電機の自己励磁問題の検討を

行った。先輩から褒められ自信を持つとともに，仕事の面白さを感じるようになった。実習後の本店配属では，送電施設を希望していたものの，リレー屋である給電施設係に配属となる。当時の給電施設係は昔堅気の職人気質で，教科書的なテキストは一切なく，まさに「先輩の技を盗む」ようにして技術を身につける。その後，施設係から系統保護担務に異動となり，系統全体の保護はどうあるべきか，あるいは周波数制御はどうあるべきか，といった業務を行うことになる。

1961 年には渡米し 1 年間ウエスティングハウスにて研修を受ける。アメリカ人のタフさと高速道路ネットワークの整備が行き届いていることに驚いた。また，それほど裕福ではない下宿先にも電話や石油の暖房があり，日本との格差を強く感じたとのことである。

(2) 支店役職

1966 年に初めての役職として，神戸支店電気課運営係長になり，竹田正美電気課長と出会う。竹田課長からは，「君は上官である電気課長になったつもりで係長をやれ」と，また「わしは本店のことはあまり知らんから君に任す」と言われ，感激し奮起した。

竹田課長から多くの現場業務を教わる中で，課長の高い業務能力を知り，「本店はお前がやれ」との発言は現場経験のない氏に自信を持たせようとの心遣いであることを理解した。氏のその後の部下への接し方に大きな影響を与えた出会いであった。

関西電力の顧問をされていた京都大学の久保達郎先生



橋本安雄 名誉員

は、本店の会議には一切出席せず、現場をまわる。それに同行した氏は、現場第一の考えを叩き込まれる。本当の現場というのはそこに勤めないと完全にはわからないと。

現場を理解しようというのを現場をわかったと誤解している人、錯覚している人がいるのではないか。完全にわかったということには至っていないということを自覚するのが非常に大切であると、氏は警鐘を鳴らす。

(3) 本店工務部門（系統計画、阪神・淡路大震災）

昭和 50 年代以降、氏は 500 kV 交差二重外輪系統や紀伊水道直流送電などの現在の関西電力の系統の骨格を構築する系統計画に携わる。

「停電しないこと、そして万一停電しても一刻も早く送電するのが私の仕事」と答える氏は、電源から配電まで事故に強い電力系統の構成と、停電発生時には迅速に復旧可能な仕組みを最も経済的に作ることを目指した。特に基幹系統についてはこの考えを重視した。それは、若い時期に系統保護の仕事を担当した影響もあるが、御母衣発電所の事故によって発生した大停電で受けた衝撃が一番大きかったと話をされる。

これらの系統計画が絵に描いた餅にならず、すべて実現できたのは中央送変電建設事務所のおかげという氏。その成功の背景には、いわゆる日本発送電(株)譲りの技術集団であったことと、強力な用地部隊を持っていたことがあるという。

阪神・淡路大震災の際には、氏は電力流通部門の陣頭指揮にあたった。6 日間という短期間で応急復旧ができた最大の理由は、電力会社の社員や協力会社の方の使命感が強かったことと考える。「単なる義務感ではなく、とにかく電気は自分が送らないといかんと、現場の人がみんな腹の底から思っていた。そういう自然に培われた使命感が非常に強かった」と、現場の力の重要性を強調された。

「部下をどう育てるか」との問いに対し、氏は、人は育てるものではなく、育つものだ と答える。また部下に育てられたとも。そして関西電力の工務部門には人が育つ良い環境があったことを指摘している。

3. おわりに

(1) 「師」との出会いで学んだこと

関西電力の飯田孝三元副社長、森井清二元社長、成松啓二元副社長のお三方は、上司というより師匠だったという氏。陽明学の「六然訓（自処超然、処人藹然、有事斬然、無事澄然、得意澹然、失意泰然）」が氏にとって人生の指針だが、お三方はその生きた見本であり手本だったと。

お三方以外にも、高校時代の Y 氏などの友人達、大学時代の剣道をご指導いただいた大阪府警師範斎藤正利先生、神戸支店電気課時代の上司である竹田課長はじめ先輩、同僚、後輩の方々、現場の大切さをご指導いただいた大久保顧問など、素晴らしい方々との多くの出会いが、学生生活、会社生活、家庭生活を充実させた。「われ以外みな師」と氏は謙虚に話されるが、氏の人徳、技術者としての誇りが、素晴らしい出会いを作ったのは言うまでもない。

(2) 後進へのメッセージ

氏は、これからの技術者、若手電力マンに対して、メッセージを送っている。

一つ目は、技術者として誇りを持って。誇りを持てば勇気が沸いてくる。技術者は、会社や上司ではなく、一般の人々に責任を負っている。そういう意識があれば、責任感、謙虚さ、勇気が自然に沸いてくる。

二つ目は、誰の言うことでもよく聞け。相手の年齢、ポジション、性別に関係なく、人の言うことをよく聞くのは、意識しないと案外難しいが、優れたリーダーやマネジャーの必須条件である。

三つ目は、常識を知ってそれを破れ。技術者は、自分の専門分野に習熟するのは当然だが、人の話をよく聞き、視野を大きくすることが必要。常識を知って、それを破る。

四つ目は、ユーモアのセンスを身につける努力を。技術者は自分に自信があり、専心する傾向にあるため、物事を一歩外れて見るのが少ないと感じており、ユーモアセンスを身につけるべきではないかと。

そして最後に、「昨日のホームランでは今日の試合は勝てない」と、私たちに。

聞き取り実施要領

実施日時：2013 年 9 月 20 日（金）14：30～17：30

実施場所：中央電気倶楽部（大阪市）

聞き手：齊藤紀彦（(株)きんでん会長）

白銀隆之氏（関西電力(株)工務部長）

竹島尚弘氏（関西電力(株)）

佐藤吉春氏（関西電力(株)）

同席者：電気技術オーラルヒストリー調査専門委員会

山本正純委員長（三菱電機(株)）

永田宇征幹事補（国立科学博物館）



齊藤 紀彦

さいとう のりひこ（正員）

1970 年 4 月 関西電力(株)入社。

2005 年 6 月 同社 副社長。

2011 年 6 月より(株)きんでん 会長。